

## W-3

### 複他動詞構文 (Ditransitive construction) とその周辺に存在する問題点

—Malchukov et al. (2010) の枠組みをもとにして—

企画・代表者・司会：山田洋平 発表者：山田怜央、大西秀幸、岡本進

コメンテーター：風間伸次郎 (東京外国語大学)

#### 1. なぜ複他動詞構文か

複他動詞構文は、複他動詞、A 項 (Agent)、T 項 (Theme)、R 項 (Recipient) からなる構文であると定義されている。Malchukov et al. (2010) はこのような構文の述語となる典型的な複他動詞として「与える」を挙げている。一口に「複他動詞構文」と言っても、構文の現れ方は言語によって様々である。例えば動詞と項の関係が格標識などによって項の側に標示される言語もあるし、動詞の側に標示される言語もあるし、その両方が見られる言語もある。

本ワークショップでは系統や地域の異なる 4 言語 (モンゴル語、アイルランド語、ラワン語、フィジー語) をとりあげ、Malchukov et al. (2010) の理論的枠組みを使ってそれぞれの言語の複他動詞構文の特徴を記述することを目的とする。

#### 2. Malchukov et al. (2010)

##### 2.1. 格配列のパターン

他動詞構文における被動者 (P: patient) と複他動詞構文における直接目的語項 (T: theme) 及び間接目的語項 (R: recipient) がどのように対応するかで Indirective タイプ ( $T \neq P \neq R$ ) や Secundative タイプ ( $T \neq P = R$ )、neutral タイプ、tripartite タイプなどに分類できる。またこうした配列が格や接置詞などによって名詞側に示される (**flagging**) のか、一致によって動詞側に示される (**indexing**) のか、あるいは語順によって示されるのかも言語によって異なる。

##### 2.2. 複他動詞構文の振る舞い

統語的操作を行ったときに、複他動詞構文のどの項が他動詞構文の被動者と同じように振る舞うかを検討している。例えば indirective タイプの言語であっても、受動文に関しては主語に昇格させやすい項は単他動詞の P 項と複他動詞の R 項であるという。これは R 項由来の操作にあたり、より secundative タイプ的である。他にも相互態や順行／逆行の操作も secundative タイプになりやすい。また抱合や逆受動、さらに名詞化した際に属格で示される項は indirective タイプを取りやすいという。

##### 2.3. 複他動詞構文を取り得る動詞や標示の多様性と意味地図

典型的な複他動詞構文を取る動詞は閉じた体系を成すことが多く、「与える」を中心としてどのような動詞が複他動詞構文を成すのかは言語により様々である。さらに R 項の標示が他にどのような意味役割を担いうるかも言語ごとに異なる様相を見せる。Malchukov et al. (2010) はこれを意味地図上に示し類型論的な特徴を示そうとしている。

#### 3. 対象とする言語

今回扱う言語は発表順に①モンゴル語、②アイルランド語、③ラワン語、④フィジー語であり、これらはいずれも互いに系統関係を持たない言語である。地理的分布については次の図 1 を参照のこと。

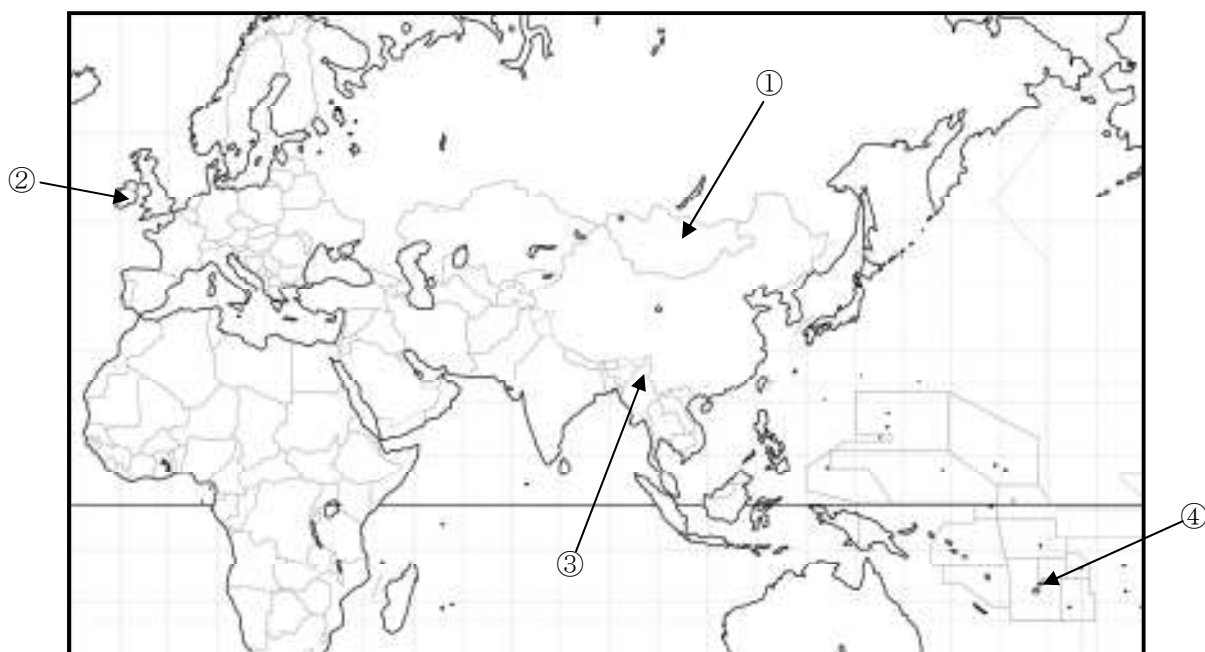


図 1. 言語地図

これらの言語の地理・系統・類型論的な特徴および複他動詞構文の特徴については次ページの表 1 に示した通りである。

表 1. 本 WS で対象とする言語一覧

言語名	地域	系統	語順	flagging	indexing	発表者
① モンゴル語	東アジア	モンゴル	SV/APV	indirective	-	山田洋
② アイルランド語	ヨーロッパ	印欧	VS/VAP	indirective	-	山田怜
③ ラワン語	東南アジア	チベット・ビルマ	SV/APV	secundative	secundative	大西
④ フィジー語	オセアニア	オーストロネシア	VS/VPA	indirective	indirective	岡本

#### 4. WS を通じてのトピック

本ワークショップではまず対象となる 4 言語について 2.3. で見たような意味地図に配置してその分布の様相を見る。次いで個別言語に関する報告として *secundative* タイプの格配列のように見えるラワン語に関する報告と、複他動詞構文を取り得る動詞の語彙的な問題をはらむフィジー語に関する報告を行う。これらの報告を通じて言語の類型として複他動詞構文をいかに捉えるか議論する。

#### 参考文献

Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath and Bernard Comrie (2010). Ditransitive constructions: a typological overview. In *Studies in Ditransitive Constructions A Comparative Handbook*. Berlin/New York: Walter de Gruyter GmbH & Co. KG